

## 他の全ての雪片と非常によく似た

### たった一つの雪片

殷熙耕

(辻本武 訳)

十二歳、クリスマスの日のお昼頃にアンナはルシアに初めて出会った。豆電球と花で飾られた聖母像の前だった。透明な冬の日の光がアンナを差して短い影を作っているだけで、そこには他に誰もいなかった。イエス誕生の馬小屋には東方の三博士と貧しい父母の像が立ち、そして寒そうに見える裸の赤子のイエスだけが馬の飼葉桶で横になっていた。アンナは馬小屋の屋根を飾っている白い綿をちよつと引きちぎってポケットに入れた。南国の子供たちと同じく、アンナも本物の雪を見ることがなかった。ポケットの中に指を入れて小さく固めてみたが、綿は元に戻ろうと膨らんだ。アンナは聖堂の前に敷かれた砂利道をざくざくと音を立てながら自分に向かって歩いて来るルシアを見た。正午の日差しを受けて、砂利が白く輝いていた。雪の結晶の形を刺繍した赤色の防寒服にクリーム色の毛皮帽子をかぶったルシアは、全く寒くないようだった。

「あんたがアンナなの？」

それはアンナが暮らす町では聞くことのないソウル言葉であった。アンナはうなずいた。扁桃腺手術を受けたために声を出してはいけないと言われ、先週聖堂に出て来なかったのもそのためであった。

「うちはルシア。シスターがあんたと仲良くしろって言ったから。この聖堂であんたが一番賢くて、踊りもうまいって？けれど思ってたより可愛くないねえ。」

ルシアは真つ黒で長いまつげをゆっくり動かし、左頬にえくぼを作つてにつこり笑つて見せた。アンナもにつこり笑つた。可愛くないというのは初めて聞いたが、ルシアからその言葉を聞いても、それほど気分悪くならなかった。アンナはルシアが履いている人造皮のブーツを見ていた。三匹の羊がプリントされた赤色のブーツは、アンナが履いているブーツと同じものだった。

「あのね。」

ルシアが聞いた。

「ところでね、ここは本当に冬でも雪が降らないの？」

「うん、降らない。」

「クリスマスにも？」

「クリスマスにも。」

長いまつげで半分隠れたルシアの瞳は、失望の様子を見せた。

「うちは誕生日が冬で、雪が降った時に着る冬服をたくさん持っているのに。」

しかしアンナはルシアを何とか安心させてやりたいと思つた。

「雪は降らないけれど、この人たちもみんな冬には冬服を着るし、冬用の靴も履く。」  
と言ってやって、自分の赤いブーツの片方を前に出して見せた。

その冬が過ぎて次の年の春からルシアはアンナと同じ学校に通った。それからアンナがルシアと一緒に過ごしたクリスマスは六回にもなった。そのうち二回はお互い誤解があつて絶交したので、その時の深夜のミサで二人は最も遠い対角線の席に離れて座った。しかし残りの四回は手を取り合つて並んでミサに行き、両親が外出して不在の家でテレビのクリスマス特集を見たり、二人で腕を組んでクリスマスキャロルが流れる街を歩き回るなどして、一緒に過ごした。ミサを抜け出して、家でカセットテープに録音した歌を聴きながら互いの日記帳を交換して読み、こっそりビールを飲んだ時もあった。それはまさに昨年のことだった。高一だった一昨年には、聖堂の生誕記念の舞台で一緒に踊りを踊った。ルシアが主役を引き受けて舞台の真中でアラベスクを踊った。今聖堂で一番賢くて踊りが上手くて可愛い子供はルシアだった。みんなはルシアが一人であるのを見ると、決まつて大きい声で尋ねた。

「ルシア、アンナは？」

アンナもルシアもボーイフレンドがいなかった。

「今度のクリスマスは特別なことをしなければね。」

ルシアは言った。

「二十歳になったら本当に面白いことは一つも出来なくなるのよ。忙しくて疲れてぐったりする

だけになるんよ。大人たちはみんなそうでしょう？」

「そうだね。」

アンナも同意した。

「私たちも来年告解をしに、他の町の神父さんのところに行かなければならないかも知れない。」  
アンナは聖堂のセシリア姉さんを思い出した。セシリア姉さんはクリスマスになると、他の町の聖堂に行つてミサに出ていた。自分の聖堂のステファナ神父さんとはよく知つた関係なので、罪を打ち明けるのが難しかつたのであつた。妻子ある男と寝た時や子供を墮した時も、セシリア姉さんは他の神父さんの許しを得るために、それまで行つたことのない聖堂を訪ねた。妻子ある男と別れる気持ちが全くないのだから、罪を作り続けていたのである。セシリア姉さんが罪を重ね、一年に一回のクリスマスの告解の時に一度にまとめて許しを得ていることをアンナは知つていた。セシリア姉さんはアンナの実の姉であるアネスと親しい仲だったので、秘密を打ち明ける声がアンナにも聞こえてきたのであつた。

「どうすればクリスマスを楽しく過ごせる？」

ルシアの問いに、ずうっと車窓を眺めていたアンナが答えた。

「雪が降らないといけないよ。」

二人はソウルへ行く汽車の中で一緒に座つていた。アンナは短くカットした髪、ルシアは三つ編みのおさげ髪で、二人とも黒のスクールコートの下は地方名門女学校の制服だった。ソウルの有名

予備校で直前入試対策授業を受けるために上京したのだった。ルシアは叔母さんの家を使わせてもらい、アンナは下宿を探した。アンナを見送った母は、ソウルは危ない所だから予備校の授業が終われば直ぐに下宿に帰るように何遍も注意した。しかし大学入試は二ヶ月後だったし、クリスマスまで一ヶ月しかなかった。アンナもルシアも親元から離れて暮らすのは初めてであった。汽車のなかで二人はずっと一九七六年の十代最後のクリスマスのことを話し続けた。何よりもその日に雪が降ることが一番最初の願いであった。

「お祈りをしないといけないのかなあ？」

と笑いながら言うアンナにルシアは返事した。

「そんなこと、必要ないよ。神様は何といつても可愛くて賢い女の子の味方なんだから。たぶん私たちにくれるクリスマスプレゼントだといって、素敵なボーイフレンドを包んで持って来てくださるよ。」

ルシアが軽口をたたくとアンナはいつも笑うのであるが、今回も笑いこぼれた。頬に当たるルシアの長いまつげがくすぐったかった。

ソウルに着くと、アンナの第一印象は寒いということだった。大気は身を切るほどの寒さで、ほこりが舞い上がる通りは乾燥していた。行き交う人々はみんなコートの襟を立て、ポケットに手を入れ、体をすくませて歩いていた。一陣の激しい風が最初の挨拶でもするかのようにアンナのマフラーを吹き飛ばし、アスファルトの上に叩きつけた。アンナの顔はすぐに赤く凍りついた。ルシアはミトンでアンナの頬を覆ってやりながらくすくす笑った。

「なに、まるで北極に間違つて配達された小包みたいじゃないの。」

アンナは「何でまた二個も配達されたの？」と言おうとしたが、口が凍てついて何も言えなかった。ルシアは全く寒そうには見えなかった。もし間違つて配達されたとしたら、それはアンナであつてルシアではないのであつた。

アンナの下宿は古くて大きな一階建ての洋館だつた。退役將軍の老未亡人が二人の娘と一緒に暮らしていた。丘の上の町だからか風がよく吹き、門を開けてくれた未亡人にも冷たい風が吹きつめた。

「もともと下宿人を置く家ではなかつたのよ。」

それがアンナにかけた最初の言葉だつた。両手にカバンとトランクを持っていたアンナは、未亡人の後ろに付いて周囲に注意しながら石段を上がっていった。長い間手入れしていない広い庭園が見えてきた。黄色い芝生の上に落ち葉が散らばり、枝だけ残つた木々はみんな枯れているように見えた。木の間には腕のない白い石膏人物像と野外テーブルがごろんと転がっていた。洋館はペンキが剥げ落ちてひび割れが走り、金属部分には錆びが出て、まるで棄てられた倉庫みたいだつた。アンナはこれほど手入れをしない家の女性ならば、怠けているのか病気なのか貧乏なのか不幸なのか、そして未亡人の姿から想像してその二人の娘もやはり誰の援助の受けられないくらいに不細工なだらうと思つた。

屋内は非常に暗かつた。注意していたつもりだったが、アンナは玄関に置かれていた赤のハイヒ

ールを踏んでしまった。ひっくり返った靴をあわてて並べなおしたが、それは初めから乱雑に置かれていたものであった。歩きたびに床がきいっと軋む音が出た。アンナが未亡人の後について足音を立てないように歩いて入った所は居間だった。アンナは火の消えた暖炉の横に立って、未亡人に下宿代を払いながら壁に掛かっている白黒の家族写真をちらっと見た。胸に勲章のようなものを何個か着けている老軍人の横に未亡人が座り、二人の娘はその後ろに立っていた。長いお下げ髪に黒いミニワンピースを着た姉、そして白いカラーの付いた制服姿の妹は二人とも美人であった。家族写真の横には、全く同じ服装と姿勢と表情をした一人の軍人の写真がかかっていた。一九七〇年十一月 明洞写場、という草書体の文字を見て、アンナはこの家が非常に静かで冷ややかな雰囲気なのは、この亡くなった人の写真のせいなのかも知れないと思った。

冷気が漂う暗い廊下の両側に固く閉まったドアが見えた。アンナの部屋は端っこの部屋だった。広げられた布団と座卓一つだけで一杯になるぐらいに小さな部屋だった。未亡人はシャワー室を改造した部屋だと言ったが、それは今もおシャワー室のように見えた。水道栓を取り外し、電気カーペットを敷いただけなのであった。すりガラスがはめられた窓は英語の参考書を広げたぐらいの大きさで、アンナが踏み台の上って何とか手が届くぐらいに高いところにあった。アンナは壁を触ってみた。シャワー室の名残りのタイルがそのままであった。青色のモザイクタイルである。それは所々で色褪せているので水滴が広がっているようにも見え、さらに部屋の周りを波が立っているようにも見えた。しかし指でこすってみると、非常に冷たくつるつるして固いタイルだった。タイルとタイルの間の目地には釘が三本打ち込まれており、そのうちの一つにハンガーが掛けられてい

た。アンナは黒のスクールコートを脱いで、そのハンガーに掛けた。そうやって初めてそこが自分の部屋になったと実感して、布団の上に座ってカバンの荷物を解き始めた。その日の晩、布団で横になった時、アンナは青いタイルに隙間なく吹き出る水滴を見た。

予備校で会った初日のルシアは、更半紙の練習帳にソウルの地図を描いた。

「あなたの町はここよ。予備校に来るバスは五三番で、五七番は南山方面へ行く。ソウル駅で分かるから、番号をよく見なきゃいけないのよ。」

アンナが尋ねた。

「あなたの叔母さんの家はどのあたり？」

「ここ、川を越えるの。三二八番バスに乗ればいいのよ。あなたの下宿から来ようとすれば、いったんソウル駅まで来て乗り換えねばいけないのよ。バスが川を越えれば、その時から降りる停留所を乗り過ぎさないように、ずうっと外を見ているの。そして停留所を覚えるためには建物や看板をよく見なきゃいけないのよ。」

「けど、みんな似たものばかりよ。」

アンナは小さなため息をついた。幼い頃にソウルで過ごし、中・高生の時は夏休みや冬休みに叔母さんの家に行っていたルシアはソウルに慣れているが、アンナはそうではなかった。

「だいたいソウルの端から端までは、どれくらいかかるの？」

「さあ、おそらく一日歩いても行けないだろうね。」



アンナはびっくりした。南の故郷の町にはどんなに遠い遠足でも歩いて行くのだが、一時間以上はかからなかった。映画館や本屋に行くのにバスに乗りルシアとおしゃべりに夢中になつても、そろそろバスから降りる時間だろう思つて外を眺めたら、その見当はほとんど当たつていた。しかしソウルでは違つた。予備校まで八つ目の停留所ということを教えてもらつたが、車窓の外を見ていてうっかり数えるのを忘れてしまうと、どれくらい来たのか到底見当もつかなくつた。アンナが適応できなかったのは、何よりもソウルの大きさだったのである。アンナは停留所を乗り過ごしたせいで、初日から遅刻をした。

ルシアは予備校の他の子たちとすぐに友達になつた。標準語を使いはしたが、南方方言のイントネーションを隠すことの出来ないアンナは、なかなか口を開かなかつた。アンナもルシアも、もう地方名門女子高の制服を着ることはなかつた。冬に誕生日が来るルシアは相変わらず可愛い冬服を何着も持つていた。十二歳の時はアンナと背が同じくらいだったが、今はアンナより一指尺（十cm 余り）ほど高いのに、少し踵のあるメリージェーンのシューズを履いていた。それに比べたら、アンナはいつも黒のスクールコートにマフラーも一つだけであつた。遅刻をしょっちゅうしたために、アンナの息を切らせて走つて来る姿はよく目立つた。ルシアはアンナのために席を取つておいてやり、いつも一番前の席に座つた。授業が始まる静かな教室を突つ切つて行くアンナの上気した顔は、恥ずかしいというよりも寒そうに見えた。ルシアはアンナに予備校に広まっている噂話を聞かせてくれた。鎧に刀を差して時代劇によく登場するタレントにそっくりの国史の先生は、本当にそのタ

レントの实のお兄さんだという話だ。何日か前にスローガンを叫んだ男二人が警察に引つ張られていった予備校近所の四階建てビルは、野党の建物だそうだ。予備校前の路地にある飲食店のなかで一番美味しいのは二番目の店だという。そこでアンナは、寒い地方の名物という蕎麦を初めて食べてみたのだが、一杯目は塩辛く二杯目は薄味だがワサビがきいて何度も涙が出てきた。ルシアは慌てふためくアンナの姿が面白くてきやつきやつと笑った。

そのルシアを故宮の後側にある軽食屋に連れて行ってトンカツをおごってやったのは、高二の時の数学塾の教師だった。アンナもルシアと一緒にその塾教師に教えてもらったことがある。

「娘がソウルで大学に通っているんだって。会いに来たみたい。」

「それで、何故あなたに会おうといったんだろう？」

「分かんない。和信百貨店の前で会ったんだけど、中に一緒に入ったらパイロット万年筆も買ってくれたよ。」

「なんで？」

「分かんない。自分のものも買ってたよ。つやつやの黒色に金縁が巻いてあって、立てて見ると雪の形の白い六角形が刻んである万年筆だったよ。」

「実はうちもそんな万年筆が欲しかったんよ。」

「けど、カバおじさんには全然似合わなかったねえ。」

数学の先生のあだ名はカバおじさんだった。アンナは、数学の問題を解く時にノートの一ページ分を全部覆ってしまうほどの先生の分厚く大きな手が、すらりとした形の万年筆を握る姿や、フオ

ークを持つてトンカツの一切れを突き刺す姿を想像した。

「ひよつとして、それ娘さんにあげるプレゼントじゃなかったの？もうすぐクリスマスでしょう。」

「分かんない。そんなこと、どうしてうちが分かる？」

ルシアの眉が真ん中に皺よった。

「何度もそんなこと聞くのなら、もうあなたに一言も話をしてあげないから。」

「ごめん。」

アンナは直ぐに謝ったが、自分だったら万年筆なんかは絶対に貰わないと思った。

数学塾の先生は幾つかのチームに分けて教えていた。ルシアとアンナが早く行く日には、授業の片付けをしている男子クラスの生徒たちと出くわすこともあった。そのうちのある男子生徒が路地で待っていて、授業を終えて帰るルシアとアンナの後を付いてきた。そしてルシアと分けられると直ぐにアンナに手紙を渡した。ルシアに渡してくれということだった。そんなことが二回もあった。二回目の時は、ルシアから受けた傷は癒してくれるのかという内容の手紙をアンナに渡した。同じようなことが起るたびに、ルシアは言った。

「どうしてここでは詰らない男の子ばかりなの。」

この言葉はソウルに来てても変わらなかつた。予備校の講義室の中を一周回ってからアンナの耳元で次のように呟いた。

「どうしてこの予備校には格好いい男が一人もないの？」

アンナは自分の頬に当たるルシアのまつ毛がすぐたかつたが、今度だけは笑うことが出来な

った。一人もいないということはないと思っていたからだ。その男子学生の名前はヨハンだった。回答用紙を回収しながら名前を見たルシアが

「ひよっとして聖堂に通っているの？」

と聞いた時、その子はルシアに目をやることもなく、

「いいや。」

と短く答えた。対話はそこで終わった。その時、ヨハンはマナーも才覚もないのによく出来るふりばかりしているという理由で、ルシアが嫌がる男子学生の仲間入りとなった。しかしアンナは違った。「いいや」と言った次の瞬間、ヨハンの目が自分に向かい、そして確かにほほ笑んでくれたと思った。短い時間ではあったが、確信することができた。アンナの顔は、だから赤らんだのだった。それにヨハンは今までアンナが見てきたどんな男子よりも、西洋の国から送って来たクリスマスカードの中の羊飼いの少年と姿が一番よく似ていた。背が高く、白い顔をして、目は遠くを見ていた。

予備校から帰って来たアンナに門を開けてくれるのは、いつも上の娘であるジョン姉さんだった。未亡人はほとんど家にいなかった。ジョン姉さんは居間に掛かっていた写真よりやせ細っていて年取って見えたが、相変わらず黒色がよく似合っていた。アンナと言葉を交わすことは多くなかった。

暖炉に火を起したら、居間に出て体を温めるように一・二度言ってくれたぐらいだった。美術大を卒業したという彼女は、自分のアトリエでもある奥の部屋で一日中引きこもっていた。肩に巻いている黒いショールやセーター、長いフレアースカートのどこにも絵具が付いたものを見たことがなかった。留学の準備中に父親が病気で倒れ、あわてて結婚したが一年も持たずして実家に戻っ

てきたというのは、裏の家のおばさんがしてくれた話だった。アンナの夕食を準備にしに来てくれるそのおばさんは、下の娘のミニョン姉さんについては浮気な性格だと言った。何回もというわけではないが、アンナと出くわすたびに、ミニョン姉さんはホテルのお菓子屋や百貨店、高級洋装店のロゴが入っている紙袋を手持っていた。プレゼントを貰うために、あのようにしょっちゅう外出しているように見えるほどだった。最初に見た瞬間から、アンナは彼女の派手と自由闊達、得意げな態度に気後れしていた。それに比べればジョン姉さんはガラス容器に入った静かな氷のようだった。冷たく固く見えるが、中ではちよつとずつ溶けていて、いつかは消えてしまうようだった。

予備校から帰って来ると、アンナは大部分の時間を部屋で一人で過ごした。座卓の前に座って勉強もし、日記や手紙も書き、手が痺れてきたら布団の中に入って横になっていたりもした。布団の外に出す顔は冷たかったが、電気カーペットが体を温めてくれた。ぬるま湯にひたったような気分ですぐさま寝てしまうこともあった。時おり廊下を通り過ぎるジョン姉さんの静かな足音に目を覚ますことがあった。床板が軋む音を聞きながら横になっていたら、見知らぬ人が息を殺して泣いている声のように聞こえて、何となく心が痛かった。暗く寒い家の午後はいつもジョンとアンナだけであつた。ゆつくり沈む船の中のように静かだった。アンナが夕食を取るために廊下を通る時、ジョン姉さんの部屋のドアの隙間から明かりが漏れているのを見るが、それは微かな光であつた。

夜になって気温が下がると、アンナの部屋の壁に氷ができた。タイルの上の湿気が薄氷になり、透き通るように壁を覆うのであつた。そして明け方になると、きらきら光る冷たく青いモザイクタイルに囲まれて、目が覚めるのであつた。自分の体が、氷がいつぱい入ったガラス容器に浸かる夢

を見た日もあった。目を覚まして、吸血鬼のように白い息を噴き出しながらそのまましばらくの間横になっていた。もうこれ以上我慢できない時になってからようやく起きてトイレに行った。尿意を我慢するのは、ソウルに来てから癖になった。予備校から帰って門に入ると、いつも決まって走るように歩くのもトイレに行くためであった。ソウルはある所から他の所まで行くのに時間がかかる。そのために腹が空いていなくても食事時になればご飯を食べておくのと同じように、ソウルの人々はトイレが見えると、そういう気持ちではなくても規則的に膀胱を空にしようとするのではない。以前だったらロシアに聞いてみるところだった。しかしどういわけか出来なかった。ロシアに聞けないことがたくさん出来たこともソウルに来てからの変化の一つだった。英語の参考書ぐらの窓を通して入って来る朝の光を受けてタイルが冷たい閃光を放つ時に目の前に浮かび上がる自分の顔について、アンナは誰にもしやべりたくなかった。アンナはバスに乗るといつも車窓を見たが、それは看板や建物を見るためではなかったのである。

ヨハンとは近しい間柄になってからも特に話をしなかった。なぜ浪人をするようになり、どの高校を卒業したのか、どの大学を志望したのかなど、予備校で気軽に話せそうな身上についてさえも話したくないようだった。成績はいつも五位以内に入って、予備校の奨学金を対象者から脱落することはなかったが、勉強を一生懸命にしているようでもなかった。運動は野球だけが好きで、楽器はハーモニカ以外に出来るものがなく、末っ子であり、牧師の父をそれほど好きではなく、手編みのセーターを好んで着て、よくタバコを吸い、これから何になるにしろ生きていくのが面白くない

と考へ、古いプレイボーイ雑誌を何冊か持っていて、読みたかったら貸してあげると女の子に躊躇いもなく言うことができ、一人いるときは歌詞がなくて気楽だという理由でポップ音楽を聴き、指で鉛筆回しをすることができ、自転車を修理することができ、喧嘩は特にしないが相手が二人がいならかうじて殴り倒すことができて、アメリカは嫌いだがヒッピーは好きで、軍隊は嫌いだ。空軍の将校には好感があり、明け方に散歩するのを好み、小言とオリンピック金メダルと、そしてギターの上質な男と一緒に団体行動は絶対に嫌いであった。アンナがヨハンについて知っていることはそれで全てであった。

しかしアンナがヨハンについて知りたかったことは、もっとたくさんあった。南方の町に行ってみたことがあるのか、少しずつ変化する四季の海が好きなのか、金ジョンサムという詩人を知っているのか、真面目なのか臆病なのか、人見知りする性格に悩んだことはないのか、春や夏になればどんな色の服を着るのか、毛皮帽子を被りマフラーを巻きブーツを履いた北欧の子供たちがスケートをしながらか凍りついた運河を通って遠い世界に出る童話を読んだことがあるのか、夕暮れの路地で鳴らされる自転車のベルの音とお母さんのお使いで豆腐を買いに行く雨降る夕方の匂いが好きなのか、温かい牛乳と出来立ての餡子入り饅頭が好きなのか、アントン・シュナクの「俺たちを悲しくするもの」を窓辺に立って声を出して読んでみたことがあるのか、うららかな春の日に銭湯に行つて冬の間着ていた下着を脱ぎ捨てて帰る時に背がちよつと高くなつたと感じたことがあるのか、晩秋にハイキングから帰って一人家で留守番をしている時にふと老後の自分の姿を想像して悲しくなつたことがあるのか、そしてこのごろ見る色んな夢、誰かの電話番号を書こうとするとボールペ

ンが出なかつたとか、道路の向こう側で恋人が乗ったバスが出発しようとする時に人波が邪魔で行くことが出来なかつたとか、デートの約束した場所に出かける準備をしたのに断水で手を洗うことが出来なかつたとか、また家に泥棒が入ったのに笑いが止まらず恐怖に震えながら狂ったように笑いこけるとかいったような長い長い夢をみたことがないのか、背が低くて痩せた女の子を好きになったことはないのか、昨日着ていたブラウスと今日着ているチョッキのうちどちらが似合うのか言ってくれるのかどうか、ルシアの言うようにカットした髪にはピンを挿さないのがいいのかどうか、クリスマスプレゼントには財布とハーモニカのなかでどちらが欲しいのか、そしてクリスマスには何をするのか。しかし、そのどれも聞くことが出来なかつた。ヨハンはルシアのボーイフレンドになつていた。神様が間違つて包んで持って来たと思つたが、何はともあれそういうことになつた。

三人は予備校が終わつた後に一緒に明洞まで歩いて行くことが多かつた。ルシアとアンナが先頭に立ち、その後ろにヨハンが付いて行つた。

「メガネを作らなきゃいけないみたい。」

「アンナが目を細く開けて前を見ながらルシアに言つた。」

「バスの番号がよく見えないよ。遠くの看板もそうだし。うち、メガネが似合うかなあ？」

「いいや。」

ルシアが答えた。

「メガネは面長の子に似合うんで、あんた、そうじゃないよ。」



「そうかなあ。」

アンナはヨハンに聞かれやしまいかと思つてすぐに相槌を打った。アンナが話題を変えた。

「今度は、おじさんは何かおっしやらなかったの？なぜ日曜日に外出するのか？」

「うん、聖堂に行くのはいいんだつて。悪い人をたくさん見てきたので心配してるだけよ。」

ルシアの叔母さんのご主人はポケットに手錠を持つて歩き回る警察官だった。しかし犯人を捕まえることよりも、主に市場や商店街で巡察に回つていゝという。巡察から帰つて来ると、叔母さんにお金を渡したり、ルシアのために運動靴やリンゴなんかを持つてくることもあつた。

「市場で何かくれと言へば、そのままくれるみたい。手錠があるし、銃もあるかも知れないじゃない。実はおじさんの見た目もちよつと怖いんよ。」ルシアはアンナと目を合わせて笑つた後、ヨハンの方を向いた。そんな時だけはアンナもルシアと一緒にふりをしてヨハンを長い間見ることができた。二人が振り向けばヨハンが口笛を吹いたりしていたが、二人の会話を聞いたのか聞かなかつたのか分からなかつた。そんなことをしながら三人は明洞のバス停留所に到着し、そしていつも一番最初にバスに乗るのはアンナだった。ルシアが乗る三二八番やヨハンの家に行く八四番が先に来ても同じだった。バスに乗つたアンナが手を振ろうと窓側に体をくつつけて外を見ると、ルシアは左の頬にえくぼを作つてヨハンに何かを話しかけていた。すぐにバスが発するが、アンナはヨハンがルシアに何か答えるところは見たことがなかつた。窓の外は灰色で、大気は相変わらず乾燥していた。クリスマスが一週間後に近づいてきたが、ソウルに雪は一度も降らなかつた。

ソウルで迎えた一回目と二回目の日曜日、アンナとルシアは明洞の聖堂に行った。三回目の日曜

日、アンナは聖堂に來たルシアを一目で見分けられなかった。編んでいた髪を解いて垂らし、映画《オーケストラの少女》で出てくるヒロインのようにベレー帽を被り、チェック模様が入った赤いコートに黒いストッキングをはいていた。ミサ布を被りながらルシアがささやいた。

「私、どう？大学生みたいでしょう。飲み屋に入っても大丈夫でしょう？」  
アンナはうなずきながら答えた。

「うん。けれど今は聖堂に來たんでしよう。聖堂の次は飲み屋に行くつもりなの？」

二人は笑い、マイクから入堂聖歌が流れてきたので椅子から立ち上がった。少年侍従が先導して、両手を合掌した紫色の服の神父さんが祭壇に歩いて行つた。

「平和が皆さんとともに。また司祭とともに。主の名前で祈りましょう。それが当然で正しいことなのです。」

聖歌隊から讚美歌を先唱した。

「聖なるかな、聖なるかな。万軍の神なる主。主の栄光は天地に満つ。天のいと高き所にホザンナ。」

アンナの聖歌集のページの間から四角の封筒が落ちた。アンナはすぐに拾って本の間にもた挟んで入れた。

「何なの？」

「うん、ジョン姉さんが送ってくれと頼まれた手紙。」

信者たちが祈禱台にひざまずいた。肘を机の上に置いてきちんと手を合わせ、目をギュッと閉じ

ているアンナをルシアが横目でちらっと見た。

ミサが終わった後、聖堂の前の坂道を下りて行きながらルシアが尋ねた。「何をお願いして、あんなに一生懸命お祈りしたの？」

「大学に合格させてくれて。」

「ウソっ、そうじゃないでしょ。」

自分で解決せねばならない問題をお願いして神様を困らせるような厚かましいことはしないようにしよう、二人は学年の始まりの時に約束していた。

「正直に言いなさいよ。何をそんなに一生懸命祈ったの？」

「それ、何かと言うと。」

何か答えをひねり出そうとしたアンナは、次の瞬間足を止めた。聖母像の前に灰色の毛織ジャンパーにバスケットの背の高い少年が立っていた。ヨハンだった。

「驚いたでしょう？」

アンナから目を離さないでいたルシアが、いたずらっぽく口ぶりで言った。

「ちよっと前に祈禱してたのよ。」

アンナは二人が会う約束をしていたとは知らなかったが、けれど気分は悪くなかった。ヨハンに会うようにしてくれと祈ったのはアンナであって、その瞬間自分の祈りが通じたという事実だけが重要だったのだ。もちろんお祈りは、それだけではなかった。

「私たち、南山に行きましょう。」

ルシアがアンナに体を寄りかかつて腕を組んだ。ミサの時は分からなかったが、甘くて芳しい化粧品の匂いがふんと漂ってきた。近寄ってくるヨハンの姿を見て、アンナの口から考えもつかない言葉が飛び出した。

「今日、雪が降るかも知れないわ。」

クリスマスシーズンなので明洞には人があふれるほどだったが、アンナはどんなに人が混雑してもヨハンを一目で見つけることができた。

その日は、雪は降らなかった。三人は長い階段を上って図書館の前庭に立ち、ソウルを見下ろした。昨年の落葉がふんわりと覆われている松林を横切り、風をいっぱい受けながらたくさん歩いた。アンナは寒くて体をすくめていたが、ルシアはスカートをはいても寒いようには見えなかった。両頬を赤くして木の間にびよんぴよんと跳んで回る姿から生気がみなぎっていた。野外音楽堂に行った時は、両手を広げてリズムカルにスタンドを一段ずつ踏んで下りていき、舞台の上に立つてバレエの基本動作を取った。そしてシヨパンの〈夜想曲〉をハミングしながら、それに合わせてアラベスクを踊り始めた。聖堂のクリスマス公演の時に踊った踊りだった。黒いストッキングにメリジェインシューズを履いてマフラーをひらめかせながら踊る赤い服のルシア。舞台の下ではヨハンがポケットに手をつこんだまま、踊るルシアを黙って見ていた。——高校時代、聖堂の高校生たちの会はセル(Seul)という名前と呼ばれた。クリスマス公演はセルの主催だった。セルを指導した舞踊クラスの先輩は、アンナとルシアのうちのどちらを主役にするのかで悩んだ。踊りはアンナの方が優れていた。しかし舞台上で引き立って見えるのはルシアの方で、公演ではそれも重要なこ

とだった。それは今ルシアを見つめるヨハンの目つきだけを見ても分かることだった。アンナはヨハンの背後で何歩か下がって立っていた。舞台の上のルシアが叫んだ。

「アンナ！あんたも上がっておいで。一緒に踊ろう！」

その言葉を聞いたヨハンがアンナの方に顔を向けた。それまでヨハンを見ていたアンナは直ぐに彼の視線を避けた。ヨハンに踊る姿を見せてやりたかったが、どういうわけか上手くできるように思わなかった。あの聖堂の公演の時もそうだった。照明を受けるとルシアは優雅に踊り、アンナは何故かルシアより動作がぎこちなくなるのだった。先輩は自分の選択が正しかったと満足したが、アンナは訝しく思った。アンナも主役になるぐらいに可愛い容貌であったが、多くの人の間に挟まれているとそれほど目立たず、特にルシアの前では輝きを失うのであった。舞台から下りてきたルシアが少し息を切らしながらヨハンに近寄った。

「おなか空いたね。」

左側のえくぼが凹んだ。上気した頬に白い息を吐くルシアに向かって、ヨハンがにっこり笑った。アンナはこのまま家に帰りたいと思った。あるいは少しずつ溶けてどこかに消えてしまいたいとも思った。しかしルシアはアンナの手を引いて、にこにこしながら言った。

「あんた、トンカツ食べてみたいと言ってたじゃない。」

ルシアは自分とヨハンの二人の姿をアンナに見てほしいと思っていることを、アンナも分かっていた。アンナは首を振った。

「うちが、いつ？」

軽食屋で手打ちうどんを食べながらルシアは、アンナが初めて食べたわさびでどれほど涙を流したのかをヨハンに話してやった。ルシアはきやつきやつと笑ったが、ヨハンとアンナは笑わなかった。

「私たち、クリスマスイブに何をしようか。次の木曜日じゃない。」

箸を口に当てながら考え込む表情でルシアが尋ねた。ヨハンが海を見たいと言った時、アンナは非常にうれしかったが、ルシアは呆れたという顔であった。

「忘れたの？ 私たち、海辺の町から来たのよ。今考えついたんだけど、子供大公園に行くのはどうだろうか。」

「子供大公園？」

アンナが問い返した。

「うん、動物園に行くのよ。寒い日に象やカバがどのように過ごしているのか見て、挨拶もしてあげたい、特にカバに。」

自分には想像もつかないような素敵なアイデアだとアンナは思った。

「毛の白いホッキョクグマもいるだろうか。いたとしても、熊だから冬眠をしているでしょうね。しかしひよっとしたら、自分の故郷と同じぐらいに寒い季節を寝て過ごすのはもったいないからと、起きているかも知れない。」

アンナは、

「きつとそうだわ。」

と言った。しかしそう言うやルシアは直ぐに、それはちよつとおかしな考えだと剣突を食らわせ、さらに動物園に行こうというのは冗談だときっぱり言った。

「クリスマスのような祝日にそんな寂しい所に行く人がどこにいるの。キャロルが流れる明洞を回り、人でいっぱいのはピアホールに行つて、そして真夜中のミサにも行かなければね。オールナイトをするのよ。通禁（夜間通行禁止）もないんだから。」

バスに乗るためにソウル駅まで歩きながら、三人は飛行機雲を見た。空は青色に染まった透明な布をぐつと引つ張つて大きく広げたかのように塵一つなかった。その上を飛行機が細くて白い線を描きながらゆつくり通り過ぎていった。

「空にも道があるみたい。飛行機が行くのを見てると。」

アンナがつぶやくと、ルシアが無愛想に答えた。

「そんなこと、誰でもみんな考えるよ。」

アンナは口をつぐんだ。以前のルシアだったら、そんな考えは誰でもする、というようなことは言わなかった。「えっ？うちもそう考えたの」と言つたりしたものだった。ソウルに来て違つてきたのはルシアだけではなかった。バスに乗つて、アンナはジョン姉さんから頼まれた手紙を出すのを忘れたことに気付いた。——明洞では日曜日でも開いている中央郵便局があると言つてあげると、ジョン姉さんは聖堂から帰る道で出してくれないかと聞いた。郵便ポストでは出せない国際郵便だった。未亡人やミニョン姉さんは日曜日はなかなか起きないのだが、早く起きてくれていてもこの二人には頼みたくないようだった。——その日の晩、アンナは聖歌集に挟まれていた四角の封筒を取

り出して振ってみた。クリスマスカードなのか。けれど外国でクリスマスの日に受け取るには遅すぎる。誕生日祝いかも知れなかった。封筒の表に書かれた国はフランスで、受取人は男性の名前だった。アンナはフランスの小さな動物園の檻の前に画架を置いてホッキョクグマの絵を描く若者を想像してみた。——その男性は貧乏な留学生で、アンナが近寄ってジョンの初恋なのかと聞いてみると、淡々としてそうだと答える。——アンナはクリスマススイブにルシアとヨハンと一緒に明洞に行くことになり、その日にジョン姉さんの手紙を出すことにした。手紙は四日遅れるだけだと思った。

木曜日は一日中天気曇っていた。通りでは人があふれ出て浮かれたような雰囲気となり、予備校の授業でもみんな上の空だった。一旦家に帰ってからまた明洞で会おうというのはルシアの提案だった。夕方になるまで時間があるからというのだった。アンナはルシアがクリスマス祝祭に似合う服に着替えるために家に帰って出直そうとしているのが分かった。結った髪を解いてロングヘアにして、唇には口紅を塗るのだ。ヨハンのためにプレゼントを用意していたこともアンナは知っていた。二週間の間お小遣いを一文も使わずに貯めて、その日は叔母さんの家に帰らない口実をいろいろ作っておき、ひよっとして小旅行の時のようにカバンのなかにローションときれいに洗った靴下を準備したのかも知れなかった。あの時上京する汽車のなかで、ルシアは言っていた。

「今度のクリスマスは本当に特別にやらなきゃね。」

ルシアの言うように十代最後のクリスマスであり、二十歳からは大人となつて忙しくてくたびれる人生が待っているのだ。ルシアにボーイフレンドがいるという事実だけでも、これまで一緒に過



ごしてきた六回とは確実に違うクリスマスだった。だからアンナはルシアが来ないとは全く予想もつかないことだった。ヨハンとアンナはまる二時間待った。ヨハンは約束の場所を動かなかった。その間にアンナが公衆電話の順番を待つ長い列に並んでルシアの叔母さんの家に電話を繰り返しかけたが、電話を取る人はいなかった。天気は寒く曇り空であった。暗くなり始めた明洞の通りは、派手なネオンサインとクリスマスキャロルと押し寄せる人波でごった返していた。聖堂に行く入口にはたくさんの電球で飾られた大型のアーチが立てられ、その下ではテレビ放送局の車が舞台を設置していた。通行する人に続けざまに肩をぶつけられるので、一カ所にじっと立っていられなかった。人々は誰もかれも浮き浮きした表情で、しゃべる時は大声で叫ぶようにしゃべっていた。

「これからどうしよう？」

アンナもヨハンに大声で尋ねた。ヨハンが何と言ったのか、声がよく聞こえず、体をそつちに傾けて耳を寄せねばならなかった。まずは夕飯でも食べてから考えようというのがヨハンの答えだった。

その日はあらゆる食堂や喫茶店、飲み屋が足の踏み場もない日であった。隅っここの席が一つ空いている食堂をようやく探し出して肉餃子を食べ、また通りに出た。肉餃子は非常に塩辛かった。アンナは水を二杯も飲んだ。時間が経つほどに人は更に多くなつた。こんなにたくさんの人を見たことがなかった。アンナは耳が詰まり、頭が割れそうだった。ヨハンは家に帰ろうと言わなかったし、どこかに行こうとも言わなかった。アンナの見当では同じ路地を三回ぐらい回ったと思つたが、アンナは何も言わずに一緒に歩いた。やっとヨハンが口を開いた。

「見つけた。」

音楽鑑賞室だった。しかし座席はなく、立っている人の行列が入口まで続いていた。

「ダメみたいだね。」

ヨハンがまた呟いた。家に帰ることしか他にすることは何もなかった。その時アンナは思い出した。

「そうだ。中央郵便局に行つて、手紙を送らなきゃならない。」

ヨハンが前を歩き、アンナが彼の後についていった。ヨハンはアンナが人混みに押されて少しでも遅れそうになるとすぐに気付いて歩みを止めた。郵便局もやはり人が多かった。遅くなったクリスマスカードを送る人とか、年賀状とプレゼントを手を持った人たちの列が長く延びていた。ヨハンは「国際郵便」と書かれた窓口を見つけ、アンナに教えてあげた。二人はその列の後ろについて並んだ。疲れてぶつきらばうな表情の職員が郵便物を乱暴に投げたのをアンナはじっと見ていた。

『アンナ』なんだけど。」

ヨハンが尋ねた。

「うちの洗礼名のこと？どうして分かったの？」

「あの時南山で、ジュンヒがそう呼んでたじゃない、『アンナ』と。だったらジュンヒの洗礼名は何？」

「ルシア。」

「ルシア」とヨハンは口の中で繰り返した。いきなりアンナが言った。

「私の洗礼名はアンナじゃないのよ。ヨアンナなんだけど、縮めてアンナと言うのよ。」

ヨハンが整理して言った。

「だからジュンヒの洗礼名はルシアで、お前の洗礼名はヨアンナだけど縮めてアンナということだろう？」

アンナはヨハンを真正面から見た。急にもどかしい気持ちになった。「そんなこと、重要じゃない」しかしこの言葉がアンナの口から出て来なかった。ヨハンはその瞬間、なぜアンナが唇をぎゅつと噛み緊張した表情をして真正面で見ると自分を見るのか分からなかった。ヨアンナはヨーロッパの慣例でヨハンの新婦に付ける名前だったのだ。アンナはヨハンがそのことにすぐに気付いてくれたらいいのと思った。それを言おうとすれば、チャンスは今だけだった。しかしルシアがない所で、それは出来なかった。

郵便局を出てから二人は、乗用車とバスが身動き取れないほどに道路が混雑しているのを見た。ソウル駅前の停留所まで歩いて行って、そこからバスに乗ろうとヨハンが提案し、二人は歩き始めた。何歩か歩くうちにアンナはいきなり目の前がちかちかしてきて、目をしばたかさせた。眼鏡を合わせねばならないのか。ぼやつと白いものが飛び始めたと思ったら、段々多くなつた。鼻筋と唇に冷たく湿つたものがくっ付いた。カメラのファインダーを覗きながら歩くように、街が揺れているみたいに感じた。東方の三博士が赤ん坊のイエスに手を差し伸べたように、アンナは手のひらを上にして両腕を前に伸ばし、呟いた。

「雪、初めて見た。」

「本当に初めて？」

とヨハンが聞いた。アンナは返事もしないで口を開けて空を見上げた。

「前から聞きたかったのだけど。」

ヨハンがアンナの腕を軽く触れた。

「お前を最初にどこで見たのか、知ってる？」

「バスの中だった。」

ソウル駅からバスに乗るヨハンは、隅っこの席に座って一瞬たりとも視線を逸らさないで外を見つめているアンナを発見した。カットした髪に黒の学生コート姿に不安で緊張した表情。その頃予備校に入ってきたばかりの地方出身学生の一人に違いなかった。ヨハンは降りる時までアンナを見守った。予備校が密集する停留所に到着したが、アンナは座席に座って手すりをギュッと握ったまま、ずうっと外を見ていた。授業が始まってから顔を赤くしたアンナが講義室に入ってから来た時、ヨハンはなぜアンナが遅刻したのか、理由を知っていた。アンナが間違っただけで降りた停留所の近くには、楽器店がいくつもあった。間違っただけで降りたのは授業初日ではなかった。また間違っただけで降りてしまったと気付くと、アンナは一度息を吐き出してから、ゆっくり歩いた。スピーカーから流れてくる音楽を聴き、ショーウィンドウの前で足を止めては楽器をしばらくの間見たりした。ヨハンにハーマニカをプレゼントしたいと思ってからは、ちよつと長く足を止めるようになったが、中に入ることがなかった。ヨハンが言った。

「実はそれからでもソウル駅の停留所でバスを待っていたら、お前を見たことがあるんだ。よくバスを間違つて乗つただろう。」

アンナは時々予備校に行く五三番バスではなく南山に行く五七番に乗って、ソウル駅を通り過ぎてやつと気付くことがあった。ヨハンはにこつと笑つた。

「何回かはお前に手を振つたりもしたんだ。降りろと言つてあげようとしたんだ。けど、お前は見えなかつたみたいで、そのまま通り過ぎて行つたなあ。いつも何を考えてあんなに夢中になつているの？」

雪はこんこんと降りしきつた。ヨハンの声は雪に吸い取られたみたいに小さく、遠くから聞こえるようだった。しかし実際は違つた。ヨハンはアンナの横にいたのだ。十九歳のヨアンナはヨハンと一緒にクリスマススイブの雪降る街を歩いてた。ソウル駅まで行くには、まだしばらく歩かねばならなかつた。アンナは、ひっそりした道で不良に出会つてもヨハンが殴り倒してくれるだろうし、自分はヨハンに守られている恋人なのだからそれが当然なんだという風に彼の横に立ち、一時も目を離さないで彼を見つめた。そして彼について知りたいことがたくさんあつたのだが、それを聞いたら彼は全て答えてくれるのなら、このまま朝まで一緒に歩きたいと思つた。ある小さな聖堂の前で足を止めた時、ひよつとしてヨハンはもう一人で歩くのは嫌になつたとアンナに告白するかも知れないと思つた。その日の晩どこに行つても、イエスは生まれた日なので豆電球がきらめき、キヤロルは響き渡るのだ。そしてその全ての上に白い雪が覆われるのだ。子羊の背中の上で光る雪のよう。アンナは思つた。まるでタンバリンの音が鳴り響くように、木星と火星と冥王星にも雪が降

りしきっているのだと。

ジョン姉さんが門を開けながら言った。

「夜十二時のミサに行かなかったの？」

両手でコートの手を掴んで門に入ろうとするアンナはうなずいた。

「お友達から電話が来てたわ。三回も。会えなかったの？」

「はい。」

ジョン姉さんはアンナの声に元気が全然ないと思ったが、何も聞かなかった。板の間に上がりながらアンナはちよつと小さい声で言った。

「手紙、今日送りました。」

「なんで、今？」という表情だったが、ジョン姉さんは今度も何も聞かなかった。廊下を歩くアンナの足元で、床板が呻き声のようにきいっと音を立てた。部屋に入るやアンナは重いコートを脱いで、倒れ込むように布団の上で横になった。青いタイルの壁が目に入ってきた。それはもはや波が揺れているようにも閃光を発する氷壁のようにも見えなかった。暴風に吹き飛ばされる青いカーテンの中で手をぎゅっと取り合つて横になっている二人の恋人の姿が揺れているように見えたのだ。

——アンナはジョン姉さんの手紙を出す前に中を開いてみた。カードが入っていて、そこに印刷された絵があった。アンナは永遠にその絵を忘れないと思った。強い風に包まれて、新婦はぐった

りとして寝入り、その彼女を胸に抱いたまま一人目を見開き、煩悶に満ちた男の悲しい表情をアンナは見た。そして暴風雨とほぼしる水と月と稲妻と海を照らす炎、その全ての中に含まれている青い光を見た。それはアンナが子供の時から見てきた海の色のように激烈で混沌として、そして一度巻き込まれたら決して抜け出すことの出来ないような悲しみがこもっていた。――

アンナはその日の晩、ソウルに来てから初めて泣き続けた。どのほどの時間が経ったのだろうか。玄関のドアが乱暴に開く音がし、舌がもつれたミニョン姉さんと叫び声とジョン姉さんの落ち着いた声があつたかと思つたら、すぐに泣き声が聞こえてきた。その悲しい泣き声がジョン姉さんではなくミニョン姉さんだというのが信じられなくて、アンナは息を殺して静かに聞いていた。

ルシアは手錠をはめて警察署に行かねばならなかった。遊びで手錠に手首を入れていたら手錠がかかってしまったのだ。叔父さんのポケットをいくら探しても鍵はなかった。小公女に出てくるキツネ毛の手袋よろしくマフラーをぐるぐるに巻いて手錠がはめられた手首を隠し、クリスマススイブにルシアは叔父さんの警察署に行った。叔父さんは巡察に出て不在だったので、背の高い人おじさんが冗談を言いながら鍵を取り出し手錠を外してくれた。周辺にいた人たちが皆が集まって来て、面白がっていた。赤いコートにロングヘアを腰まで垂らし、リップグロスを塗り、左頬にえくぼがある可愛い手錠姿の少女が警察署に来たのは、これまで一度もなかったことだ。

「うちがあんたの下宿に電話するということ考えなかったの？」

「うん。誰もいない家に電話をかけて、何になるのよ。」

「クリスマスのような日に誰が家にいるというの。」

「けど、ジョン姉さんは家にいたじゃない。」

「どこにも出かけないのは哀れな出戻り女ということなの？」

ルシアはアンナの間違いではないことは分かっていたのだが、怒りをどうすることもできなかった。予備校の授業が終わった後バス停留所まで行く間、二人は一言も話をしなかった。ルシアが停留所で止まらずに歩き続けて行ったので、アンナも後ろについて行った。ヨハンがいなくても明洞まで歩いて行くようだった。しかしルシアは明洞の停留所もそのまま通り過ぎて行った。ルシアが行った所は聖堂だった。アンナはルシアについていき、花で飾られた白い聖母像の前で歩みを止めた。二人は並んで立ったまま、同じように口をぎゅつとつぐみ、しばらくの間足先だけを見下ろしていた。アンナの靴は学生用の短靴で、ルシアはリボンの付いた新しい靴を履いていた。歩いている時は分からなかったが、冷たい風が吹き、体が震えてきた。アンナは海辺の町を思い出した。クリスマスでも聖堂前の砂利は温かいのだった。

「あのね、あの時のブーツ、思い出すわ。」

「アンナが先に口を開いた。ルシアは何も答えないうでアンナの方をちらつと見た。」

「私たち同じブーツを履いて、そこに三匹の羊が描かれていたじゃない。」

「うん。」

ルシアが答えた。

「思い出した。」



アンナはルシアの目を見た。

「それで、その羊の後ろで雪が降っていたのかどうか、思い出さない？」

「いや、降ってなかった。」

ルシアが長いまつげをゆっくりとしばたかかせて、アンナの方にちよつと頭を回した。

「それは、あんたが好きなクリスマスカードにあった絵じゃない。子供の羊の背筋できらきらしていた。覚えてたのね？」

アンナはくすつと笑った。

「うん。」

「あんたが好きなものは、みんな知りたかったから。」

「なんで？」

「そんなこと分かんない。」

ルシアの声が少し高くなった。

「そんなこと、どう説明しろというの？」

ある若い女が近寄って来るのが見えた。セシリア姉さんにそっくりだとアンナは思った。女がお祈りをするためにハンドバックからミサ布とロザリオを取り出すのを見て、二人は聖母像の真ん前の場所を空けてあげた。女はひざまずくや、静かに泣き始めた。アンナとルシアは目くばせして、なるべく足音を出さないようにしてその場を離れた。クリスマスが過ぎれば、もうすぐ学校の冬休みだ。その時から予備校が慌ただしくなり、予備校生たちも大幅に代わる。クリスマス以後、ヨ

ハンの姿を見ることはなかった。アンナもルシアもそのことには何の話もしなかった。二人は一月の一月間、一生懸命に勉強した。

ルシアは一回だけアンナの宿に遊びに来た。いつものように下宿にはジョン姉さんだけであった。ルシアが気安くアトリエを見学させてくれと言った時、アンナはちよつと驚いた。同じ家に暮らして一月になるが、アンナはそんな話をするのが出来なかったからだ。意外にもジョン姉さんは快くアンナとルシアにアトリエのドアを開けてくれた。アンナはルシアの後ろについて入って行き、これならば自分が言ってもジョン姉さんが部屋に通してくれただろうにと思った。アトリエの中は意外と明るかった。たくさんのキャンパスが重ねて立てられていて、画架に置いた描きかけの絵もいろいろあった。主に青色系統の絵だった。そしてアンナが見たカードにあったように、悲しい表情の恋人が互いに抱き合い、青波にのみ込まれる絵もあった。ルシアが感嘆の声を上げた。

「素晴らしいわ。運命的な愛、そんな感じだわ。」

「そう？」

ジョン姉さんが淡々と答えた。右手を頬に当てたルシアが真剣な表情で長いまつげをパチクリする間、アンナは一方の壁に掛かっていた小さな絵を見上げていた。花がたくさん咲いている綺麗な家だった。晩春の季節のようだ。庭の芝生は青く生え始め、土から水を吸い上げた桜の木は薄緑の葉をつけて、今まさに散ろうとする桜の花の向こうに、紫色のライラックと白いスモモの花、赤いボケの花が見事に描かれていた。クロフネツツジとトリネコの白い花は足元を覆い隠していた。その間に立っている石膏の女性の裸身が空に向かって飛ばんばかりに、髪の毛をなびかせていた。そし

て白いレースのように繊細で綺麗に塗られた庭園のテーブルの上の四角のお盆には、春の光を浴びて透明に光るガラス瓶とコップが置かれていた。ガラスコップは全部で四個あり、それぞれ違う量の赤色のジュースが入っていた。誰かがいっぺんに飲み、誰かがちよつとずつ、誰かは最初から飲まなかった様子だった。何人かがその場に一緒にいて、そして過ぎ去ろうとする春のある日の一瞬の痕跡。それがどういいうわけか、アンナの胸を締め付けた。

三十二年後の春、アンナはヨーロッパのある美術館でジョン姉さんのカードにあった絵を見た。コシユカの〈風の花嫁〉だった。それはずっと昔にたった一度見ただけだったが、間違いないとアンナは思った。そのカードに書かれていた文章も忘れていなかった。

「私の夢はあなたに七〇歳の誕生日祝いの手紙を送ることだ。そして妻の胸で九十四歳で死にたい。」

そのカードはジョン姉さんが誰かからもらったものだった。おそらくその人は、コシユカが意を遂げられなかった相手の女性のアルマに言ったように、自分の人生でもって愛の喪失を報復しようとして一節を書いて送ったのかも知れない。そしてジョン姉さんはその意を受け入れなかったためにカードを送り返したのだった。アンナはその絵を見た後、記念品店でコシユカの画集を買い、美術館のカフェに入った。コーヒーを飲みながら画集を見ていると、ある一文に目を止めた。

「この地上で結ばれることのない愛ならば、嵐が吹く夜空の中を我々は永遠に一緒にいなければならぬ。」

ココシユカが《風の花嫁》に付けた文章だ。あの人がこの一節を書いて送つたら、ジョン姉さんはカードを送り返さなかったかも知れないとアンナは思った。人々は孤独な人を誤解する。彼らは強くもなく、ゆとりもないなく、一人でいることを好まない。そして一人ではないといつても、人はいつも自分だけの孤独を持っている。我々みんなはココシユカの眠らない恋人たちのように、お互い抱き合ったまま厳しい暴風雨のなかを流れていくのだ。

ヨーロッパ旅行から帰つて来た年の五月、アンナはNASAの探査ロボットが火星から地球へ送つた写真を新聞で見た。北極圏の氷原かに着陸して、光の速度で伝送した写真だという。本当に火星に雪が降っていた。写真の説明によれば、火星の雪は地上には積らず、地面に落ちる前に消えてしまうという。一九七六年のクリスマスのことを思い出すと、アンナはトイレに行きたくて、夜の夜道を無我夢中でさまよつた記憶だけが残っていた。アンナはそのまま明け方まで一緒に歩きたかった。しかしある瞬間から、アンナは足を動かすことが出来なくなった。唇を強く噛んで、下あごが痺れるほどだった。コートのポケットの中の両手は膨らんだ腹の下をぎゅっと握み、へその下に強く力を入れて、激しく息をした。どこでなのか、アンナの靴先におしっこが一・二滴落ちて、しみになっていた。ふくらはぎを伝つて下りてくる一筋の生温かい感じがした時、アンナは走り始めた。後ろからアンナの名前を呼ぶ声が何度か聞こえたが、アンナは振り返ることも返事をすることも出来なかった。アンナは泣き出しそうになって走った。扉が開いている建物が見えるや、あたふたと中に駆け込んでいって、死に物狂いで階段を上り始めた。階段と階段の間にある全てのドアを叩いたが、トイレはどれもこれも固く閉まっていた。アンナの荒い息はさらに激しくなり、足音に

段々元気がなくなってきた。五階まで上がった後、アンナはついに服を下ろしてしゃがんでしまった。温かい尿がべとべとした黒い液体のようにゆっくり足元でたまり始めた。周りは真つ暗で非常に静かだった。路地の中の旅館のネオンの光だけが点滅して、アンナの足元の黒い水たまりを照らしたり消したりするのみであった。アンナは立ち上がって階段の手すりにしがみつくようにしながら、ゆっくり階段を歩いて下り始めた。今のこの時間、この世の全ての門は閉められていて、自分を待つてくれる人は誰もいなかった。今も雪は降っているのか。次の瞬間、アンナはびっくり仰天した。てかてかと光る黒い水の流れが階段を濡らし、ちよろちよるとアンナを追って下りてきたのだ。セシリア姉さんがこっそり産んで逃げてしまった胎児に形があったなら、そんな姿だったろう。秘密と汚濁、罪と羞恥とそして選択の余地のない完結した孤独、それらはアンナの後について階段を流れ落ちるのだった。アンナは必死に走って下りてきて、誰に言うのでもなく一人つぶやいた。「いいや違う。私はそんなことは祈らなかつた。ただ雪が降るようにしてくれと言っただけだ。」その言葉はその通りだった。アンナは夢を見たことがあつた。西洋の国から来たクリスマスカードにあつたように、木星と火星と冥王星まで雪がしんしんと降る夢を見たことがあるだけだ。

一九七六年のクリスマスには何も起こらなかつた。ひよつとして雪も降らなかつたかも知れない。冥王星という名前は天体から消え、そして火星に降る雪、他のすべての雪片と非常に似たたった一つの雪片、それは地上に永遠に落ちこまないのだ。

【註】 「ココシユカ」

オスカー・コロシユカ (Oskar Kokoschka, 一八八六年二月一日ー一九八〇年二月二日) は、二〇世紀のオーストリアの画家。クリムト、シーレと並び、近代オーストリアを代表する画家の一人である。表現主義に分類されることが多いが、ココシユカはウィーン分離派、「青騎士」、「ブリュッケ」などの当時の芸術運動やグループには参加せず、終始独自の道を歩んだ。

(ウィキペディアより)



ココシユカ「風の花嫁」